新連載

実験的教育論［1］

教育は壮大な実験である

東京外国語大学教授　町田宗鳳（まちだそうほう）

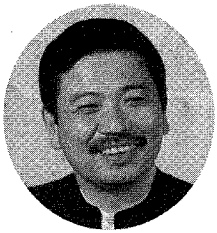
屋根のある学校に行ける。印刷された教科書が与えられる。教養ある先生に教わることができる。これらのごく基本的な事実が実現しているだけでも、素晴らしいことである。世界各地に暮らす無数の子どもたちが、教育の機会を一切剝奪されている非情な事実を思えば、日本の学校教育にさまざまな不備があったとしても、それを糾弾することばかりに躍起になるのは、まちがっている。

まずは明治以来、この国に実施されてきた近代教育の成果を素直に認めたい。でなければ、何世紀にもわたって封建制度に押し込められていた日本という国が、狭い国土と乏しい天然資源というハンディを背負いながら、ここまで世界の地政図の中で重要な位置を占めるに至り得なかったのは、明らかである。

明治維新そのものが国家の命運をかけた壮大な実験であったが、その後に始まった学校制度もまた、成功の保証なき教育的実験であった。結果、一部のインテリのみならず、国民全般の知的水準は格段に高まることになった。日本社会における生活の利便性や安全性も、国民的な教育水準の高さがもたらした文明的賜物という見方もできるのである。

むしろ、そのような恵まれた生活環境に暮らしながら、国民の多くが日本文化を誇りに思えず、自国の行く末に明るいものを感じることができないでいるという事実にこそ、日本の教育基盤に、深刻で重大な問題が潜んでいることを物語っているのかもしれない。

私自身は、今までアメリカ、シンガポール、日本の三か国の大学教育に携わってきた経歴があるものの、初等中等教育の現場経験をもたない。そういう人間が教育論をぶつことに何か後ろめたいものを感じないわけではないが、長い海外生活を経た後で、日本の教育の飛躍を願う気持ちには偽らざるものがあり、今月号から連載形式で、未熟ながらも愚見を述べさせて頂く所存である。



町田宗鳳（まちだ・そうほう）1950年生まれ。14歳で出家し、臨済宗大徳寺で修行した後、34歳で寺を離れ、渡米。ハーバード大学神学部修士課程、ペンシルバニア大学中東・アジア学部博士課程を修了、プリンストン大学、国立シンガポール大学などを経て、現職。専攻は比較宗教学、比較文明学、生命倫理学。ホームページ：www.tufs.ac.jp/ts/personal/soho/

知育にかたよった日本の教育

さて、私が日本の学校教育にいちばん感じるのは、教育に知育、体育、徳育の三面があるとすれば、そのいずれも不徹底のままに終わっていることである。いわゆる受験をめざした詰め込み教育で、十分すぎるほどの知育ができているのではないか、という反論があるかもしれない。

しかし、それは断片的な知識を暗記させているだけであって、新しい知識を獲得することの喜びを若者に与えているわけではない。教室での指導は、生徒に知的好奇心を掻き立てるための導入口にしか過ぎない。若者は何かに強い興味を抱けば、ほうっておいてもそれを探求し始める。

私は米国のプリンストン大学で八年間、教鞭を取っていたが、つねにハーバードとトップを競うこの大学に入ってくる超エリート学生を教えていて、彼らの知識は日本の平均的な高校三年生のそれに劣るのではないかと、しばしば思うことがあった。ましてや、有名進学校の高校生ともなれば、非常な難関に臨むことになるわけだから、膨大な量の知識を吸収しており、アメリカのアイビーリーグの学生と競っても、知識のボリュームにおいて決して遜色がないだろう。

しかし、である。その彼らが、ひとたび大学に入る

と、伸びない。それが、名門といわれるいくつかの大学で教えてきた私の実感である。何らかの問いかけに対して、自分の意見と、それを論理的に表現する能力を持ち合わせる学生も少ない。そのような受身の態度は、熾烈な受験戦争による燃え尽き症候群だと言われるが、知識の正しい吸収の仕方を身につけてさえいれば、その知的好奇心は継続されるはずである。

反対に知識が不足していると思われたアメリカの学生たちは、進級するにつれて、どんどんと伸びていく。なぜかといえば、彼らは研究テーマの設定の仕方と、その追求の仕方を身に付けているからである。日本の大学とは異なって、図書館は深夜まで開放されているので、何時間でも資料を捜し求め、読み漁る。その追求心こそが、学問なのである。あらゆるジャンルの知識を断片的に記憶することは、残念ながら学問と呼び得ない。

体を動かす喜びを教える

では、体育のほうはどうか。ごく一般論ではあるが、日本ではスポーツが得意な学生は、勉強が苦手であり、その逆もまた真なりということになっている。私も運動好きなほうであるが、学校の体育授業を心から楽しんだという思い出はあまりない。性格的に集団行動を嫌う私は、体育の先生から号令をかけられるのが、苦痛だったのである。

体育とは、軍隊式の集団行動を教えることではない。ましてや、体力測定の数値やスポーツの記録を競わせることでもない。他者と比較して、プレーが上手かどうか、足が速いかどうか、などを体育の目的と思ってはならない。

体育とは、ただただ体を動かすことの喜びを若者に教えることだ。その動かす手段として、さまざまな形式を選択すればよいだけである。近代スポーツや日本的武道だけでなく、太極拳、フリーダンス、和太鼓のようなものを学ぶ機会を与えれば、どうだろうか。思春期には鬱屈した感情を持ちがちであるが、その感情表現を言葉ではなく、肉体を通じてしたほうが、無理なくできるように思われる。つまり、理想的な体育は、最高の道徳教育でもある。

体を動かすことの喜びを真に味わえば、進学しようが、就職しようが、その若者は生涯、運動することを楽しみ、健康を維持していくだろう。現代日本は、不活発な若者で溢れている。幼い顔をしたまま大人びてタバコ

をふかす若者や、早朝からパチンコ屋の前で列をなす若者に、筆者は亡国の危機を感じてしまうほどである。山に登っても出会うのは、圧倒的多数が中高年の人たちである。若者は繁華街から離れようとしないか、自分の部屋に閉じこもる。これらの現象は明らかに日本の教育に、何か重要なものが欠如していることを示唆している。

米国の大学生には、文武両道の者が多い。恐ろしく秀才であると同時に、バスケットや水泳のエースであったりもする。そのうちにオリンピック・メダリストの中から、ノーベル賞受賞者が出るだろうと私は予言しているのだが、それほど知的活動と肉体の生命力は、切っても切れない関係にある。

米国の体育授業では、各スポーツの「型」よりも、まずエンジョイすることを生徒に教える。ひとたびエンジョイすることをすれば、その若者は少しでもうまくなろうと、自分で技術を習得していく。日本の体育では、そのスポーツの技術にこだわりすぎ、エンジョイさせないから、後が続かないのである。

教育改革の第一歩としての徳育

最後に、徳育について考えてみよう。いうまでもなく、これはすでに、ほぼ死語となっている。教育現場に、封建的かつ宗教的な要素を持ち込むことが許されず、朱子学に思想的基盤を置いていた徳川幕藩体制以来の「徳」の概念など、とうてい子どもたちに説けるものではないと考えられている。

しかし、「徳」という言葉のニュアンスから封建主義と宗教的要素を差し引いて、それを「人間性」と置き換えてみたらどうだろう。学力や体力の促進には、それなりの努力を払いながら、人間力の育成はほとんど顧みないというのは、大いに問題である。日本が成熟した近代国家として成長していくためには、知育と体育の陰に押しやられていた徳育に、もう一度光を当て、少しでも深く豊かな人間性を備えた若者を育んでいかなくてはならない。目先の利益ばかりを追い求めるような人間で埋め尽くされるようになれば、日本はやがて衰亡の歴史をたどらざるを得ないだろう。

いや、道徳の時間は設けてあると言われるかもしれないが、それはほとんど機能していないのが、実態ではなかろうか。もしほんとうに、それが効果を上げているのなら、弱者への暴力事件や援助交際という社会現象は起きないはずである。道徳は、教室で学ぶものではない。

若者の人間性を深めるには、どうすればよいのか、といった工夫が、もっとなされても良いのではなかろうか。徳育の方法論については、その分野がほとんど手つかずに放置されてきたので、白紙状態といえる。だからこそ、やりがいのある仕事ではなかろうか。若者の人間性を深めるには、まずそれを教える側の人間性の深まりがなされていなくてはならないが、教条主義的な指導では、何の成果も上がらないことは言うまでもない。文部科学省や教育委員会がトップダウン式に指導要領を突きつけるのではなく、もっと現場で直接子どもたちに触れている教師の意見を尊重することが、教育改革の第一歩となる。

教育は実験の連続である

しかし何事にせよ、新しい試みには、マニュアルがないわけだから、それなりのリスクが付随している。そして、管理責任を問われないようにするため、そのリスクを極力避けようとする傾向が、日本の組織には強すぎるように思われる。そのような職場環境では、画期的な意見をもつ人ほど、黙りこまざるを得なくなる。そして結局、看板だけ挿げ替えて改革実現とし、実質的内容は現状維持のまま、物事は進んでいく。そこに組織の停滞が発生する。

私はつねづね教育は、絶え間ない実験の連続であるべきだと考えている。時代の風潮、文化の形態が刻々と変化していく中で、最も鋭い感受性をもつ若者の教育方法が、十年二十年前と同じであってよいはずがない。教育効果を改善するための新しい教授法を実験的に試みることもなく、既存の形式に満足してしまっている学校は、死に体に等しい。活力のある教育は、生き物のように新陳代謝していなくてはならない。

実験というからには、当然のことながら失敗もあり得る。むしろ、失敗のほうが多いのかもしれない。しかし失敗を恐れて、何もしないことこそが、すでに教育の失敗ではなかろうか。その失敗の犠牲者は、いうまでもなく子どもたちである。結果が思わしくなく、失敗とみなされた実験的教育も、教師が一丸となって、情熱をもって取り組まれたものなら、その情熱は確実に子どもたちに伝わっているはずであり、そこにすでに一つの成果があがっていることになる。

そして、新しい教授法を実験的に試みることは、単に進学率の向上を目的としたものであってはならない。教

育的実験とは、まさにそのような既成の価値観を基盤とした教育方針に挑みかかることを意味するのである。極論すれば、「わが校では生徒たち全員が、すぐさま真剣に取り組むべき人生の課題を見つけたので、一人も大学進学を希望する者がおりません」と誇らかに宣言する高校があってもよいわけだ。大学進学率で学校の評価をするのは、時代遅れの発想のように思えてならない。

教育的実験の一例として、秋田県の国際教養大学の紹介をしておきたい。そこでは、四年間の授業をすべて英語でこなし、そのうち一年間の留学を義務づけるという画期的なカリキュラムが組まれている。周囲にコンビニすらない田舎の小さな大学に、全国から若者が集まって勉学に勤しんでいる光景は感動的である。東北の冬は長いが、首都圏にある有名私立大学に合格しても、こちらを選択する学生が少なくないらしいから驚きである。

この大学を始めたのは、秋田県の全面的応援を受けた中嶋嶺雄学長であるが、この大学を設立する時点では、それが成功するかどうかの保証は、どこにもなかったはずである。それなりの緻密な準備があってこその実験だと思うが、それが徐々に実績を上げつつあるわけだ。国際教養大学における教育的実験の結果を判定するには、もう少し時間がかかりそうだが、日本の大学改革に鏑矢を放ったことは、高く評価されるべきだろう。

極東アジアの情勢を考えれば、英語だけでなく、中国語や韓国語を教育言語とする高校や大学が登場してきてもよいように思われる。それは単に国際貿易のために即戦力をもつバイリンガル人材の育成のためというわけでなく、外国語を徹底的に習得することによって、若い頭脳集団が日本人独特の閉鎖的な思考回路を打ち破り、この国に新しい文明の形をもたらしてくれる契機となる可能性が大だからである。

新たな教育機関を作るというのとは、まったく異なったレベルで、現場の先生たちも、さまざまな教育的実験を試みるべきではないか。そのような、ある程度のリスクを伴った試みを許さないような職場環境なら、そこに留まる意味がどれほどあろうか。多情多感な魂を相手に格闘せざるを得ない現場教師の姿勢は、つねに実験的かつ挑戦的であらなくてはならない。そのような勇気ある先生が一人でも多く出現してくることこそが、教育改革への実質的貢献であり、ひいてはこの国の未来に明るい希望の光を投げかけることになると信じている。